# 命と水

岩見沢市立北村中学校　三年　戸田　匠翔

水は、命を助けることができるものであり、また、残念ながら命を奪うものでもあります。その前提に立って私たちは生きていかなければなりません。

まず、水が命を助けることについて考えてみます。動物も植物も、生きているものは水がないと死んでしまいます。私は、いちごを育てたことがあります。最初はこまめに水やりをしていましたが、だんだん忘れてしまい、いちごは枯れてしまいました。それを見て私は、植物も栄養だけあたえていれば良いということではないのだと気づきました。水をしっかりかかさずあげないと植物は枯れてしまうのです。

私の家は稲を育てる農家です。田んぼには水を張っていないといけません。そうしないと稲はだんだん枯れていき、売り物になりませんし、家で米を食べることができません。私の家だけでなく、米を主食とする日本人みんなが困ります。いちごを枯らしてしまったこととは比べものにならない大変な事態になってしまうのです。また、いくら水を張っていても稲が水を吸収するので少しずつ水は減っていきます。そのため、父は毎日、田んぼを見回って水を調節するなどの管理をしています。そのような苦労をして、初めておいしいお米を作ることができます。

私は真夏の暑い日に仕事の手伝いをしていて、頭が少しくらくらしたことがありました。でも、水を飲むと、少しずつ治まってきました。私が暑がりだということもありますが、稲も私も、水が生命を支えてくれているのだと感じました。

次に、水で命を落とすことについて考えてみます。代表的な例は、水害被害が起きた時です。豪雨、洪水、津波によってたくさんの人の命が奪われます。とくに、東日本大震災は、津波によってたくさんの人の命が奪われたとニュースや学校の授業で耳にします。映像で見た時に自分だったら冷静に判断することは絶対にできないと思いました。いくら訓練をしていても実際に波が押し寄せてきたらパニック状態になると思います。ですから、人事のように聞いているのではなく、自分にも同じ場面が起きた時のことを常に考えながら毎日を過ごす必要があります。

昔、北村で洪水があったことを幼い頃、祖父から聞いたことがありました。

「堤防が破壊されていて、家の一階にあるソファーが水によって浮いていた。」

と言っていました。私は、ソファーが浮くくらいの水が家の中に入ってきていたことに驚きました。そして、復興に数年もかかったそうで、本当に復興に時間がかかるくらい大変な被害だったと感じました。私は、その時の写真をインターネットで見ました。水が堤防を越えて、広い石狩平野を埋めつくし、たくさんの家が浸水し、田畑が泥水で見えなくなっていました。札幌開発建設部は、この洪水の後、浸水被害を軽減するために、河道整備や支川の洪水調節施設と合わせて、北村遊水地の整備を行ったそうです。そう言われてみると、確かに北村には、よその町にはない排水機場がいくつかあることに改めて気づきました。この遊水地は、北村だけでなく、石狩川の下流に広がるいくつもの大都市を水の被害から守っているそうです。このような整備のおかげで、今は、水害被害は起きていません。だから、私たち若い世代には、水害への恐怖があまりないのだと思います。しかし、災害はいつ起きるかわかりません。起きてしまっても慌てなくていいように日頃からハザードマップで避難場所を確認したり、食料の備蓄をしたりなどの対策をしようと思いました。

この作文を通して、水の大切さや怖さを改めて知ることができました。田んぼや畑、そして全ての命の源である水と、これからも真剣に向き合っていこうと思いました。